

現地調査：台湾桃園県復興郷角板山のタイヤル族

——「和夫」さんと日本人妻緑さん——



菊池 一 隆

はしがき

このインタビューは、二〇〇六年八月二日、一三日の両日実施したものである。名古屋外国語大学教授の魏栄吉氏ら台湾人の友人と車三台を連ねて、インタビューのため角板山の陳振和（日本名は「泉和夫」）氏、緑さん夫婦の自宅を訪ねた。角板山では、一九九五年三月二日、九九一年一月一〇日、林昭明氏（お会いし、旧交を暖めたが、現在、心筋梗塞の手術を受けたばかりで、まだ顔色も悪く、挨拶しただけに留めた）に蒋介石政権による「白色テロ」に関する二回のインタビューを含め、角板山にはすでに五、六回は訪れている。ここには、蒋介石の貴賓館跡（現在、公園になっている）、旧要塞、及びダムや吊り橋などもある。

夫の陳振和氏（日本名「泉和夫」）。自らも「和夫」と言い、他の人々

も「和夫さん」と読んでいたので、以下、和夫さんと統一）はタイヤル族、特に角板山のタイヤル族について話し始めた（日本統治時代、日本語教育を受け、現在も日本語で日常生活をしているため、日本語が流暢である。したがって、本インタビューはすべて日本語でおこなっている）。緑さんは結婚した当初、新聞記者などに追い回された経験から、当初、インタビューにあまり乗り気でない御様子であったが、次第にいろいろ思い出しながら楽しそうに話してくれた。この日だけでは話が終わらず、結局、私一人が残り、和夫さん宅に泊めてもらうことになり、魏栄吉氏は帰宅した。夕方、和夫さんはバイクでタイヤル族の友人が経営する飲み屋に連れていってくれた。山の中に開放的な飲み屋がポツンと一軒だけあり、蚊の襲来と野犬が何匹もよってくるのはまいった。だが、山並みのシルエットが見渡せ、また夜にもかかわらず、電灯の光に南国の蝶（蛾ではない）が舞う。帰りは満天の星空であった。大気が澄み渡り、光がほとんどないためか、無数の星が鮮明に見えた。帰宅後、夜の一二時頃まで話し込む。朝七時半、起床。台北の街の蒸し暑さとは異なり、角板山は涼しく、冷房なしに熟睡できた。朝食後、タイヤル族の長老で、いろいろ話が聞けるといふことで、再びバイクの後ろに乗せられて林茂秀氏（父が「共産主義者」として蒋介石の国民政府に殺害された）の自宅を訪れる。

二人の簡単な紹介をすると、陳振和さんの日本名は「泉和夫」で、インタビュー当時、六九歳（男四人、女四人の八人兄弟で長男）、緑さんは六四歳（五人兄弟の一番下）である。桃園県復興郷澤仁村（1、2）に住み、水道局に勤めた公務員であったが、それも退職した。和夫さんは背が高く、流石「山の人」という感じで、ガッチリした体格をし

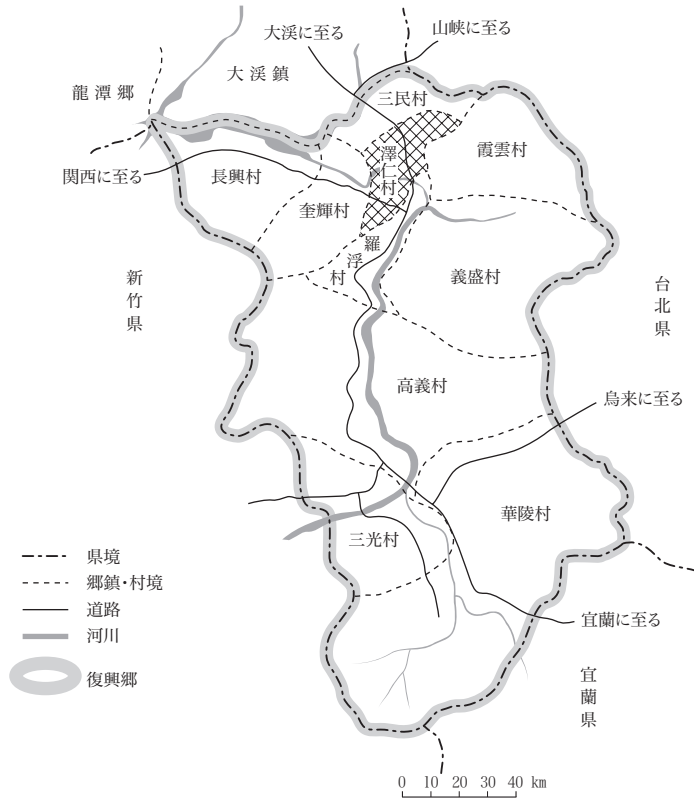


図1 復興郷行政区域図

出典：桃園県政府『桃園県変更都市計画審核摘要表』（1980年7月5日～8月3日公開）から作成。
 なお、和夫・緑さんの住居は潭仁村にある。

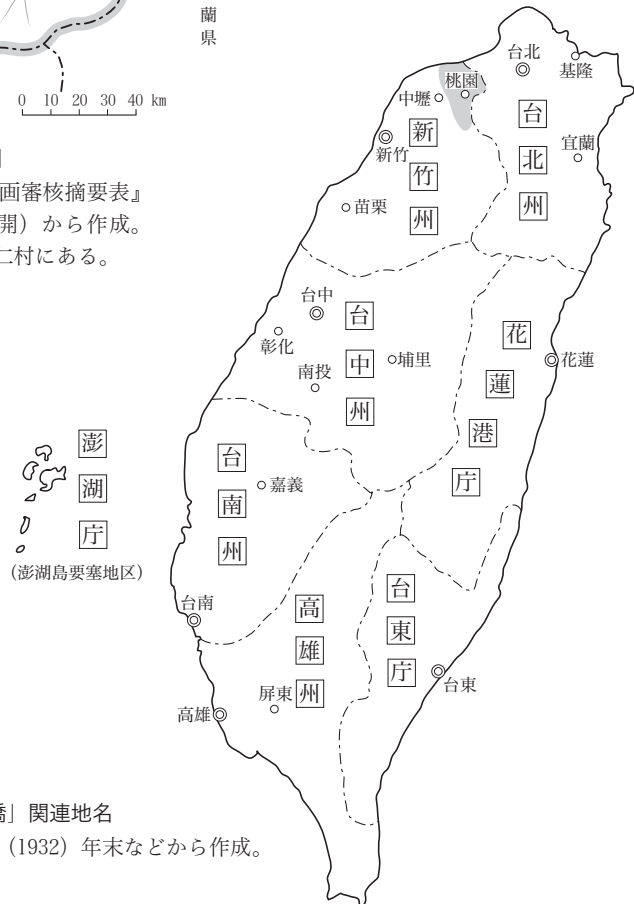


図2 台湾「華僑」関連地名

出典：『台湾警察現況図』昭和7（1932）年末などから作成。

ている。彼が自慢する父の名前は「泉民雄」である。和夫さんは六人兄弟姉妹の長男で、上三人はすべて女である。和夫さんは経済的理由で中学を中退して働かざるを得なくなり、水道局に就職した。下の第二人は医者、姉一人も医者(?)。緑さんは工場で働いて家計を助けた。緑さんの話から「異文化摩擦」を聞き取ろうと思ったが、山での生活に順応し、楽しそうに話している。子供は娘二人で、長女は日本に行き、日本語学校に通った後、カラオケ屋で働いていたが、現在は台湾に戻って結婚している。次女は政治大学に入学して、経営管理を専攻した。「政治大学は台湾大学に次ぐ大学で、日本で言えば京都大学よ」と、緑さんは自慢した(写真1)。

なお、台湾中部では、一九三〇年一〇月台中州霧社でタイヤル族が日本植民地の理蕃政策(圧政と過度な強制労働、差別)に抵抗してモーナルダオ指導下で武装蜂起を起し、日本人の老若男女一三四人を殺害した。これに対して、日本は飛行機までも駆使(毒ガスも使用したといわれる)し、弾圧した。タイヤル族は二〇〇人余が抗議の集団自決をした。だが、結局、日本



写真1

軍・警察は第二次霧社事件で約一〇〇〇人のタイヤル族を殺

害、報復し、生き残れたのは僅か婦女子を中心に二三〇人だけであったとされる。これは、いわゆる霧社事件であり、極めて有名である。しかし、これに対して台湾北部のタイヤル族はほとんど明らかにされていない。これでは霧社事件(この時、北部タイヤル族はどのように動いたのだろうか?)はもちろん、台湾タイヤル族を明らかにできないのみならず、タイヤル族を除いて台湾原住民の全体像を解明できないと考え、この研究に着手することにした。

本稿では、重要な話のみならず、世間話など、簡単な話を含め、台湾北部におけるタイヤル族の歴史、経済生活、民族、伝統、文化、及び考え方を考察する契機となると考え、コメントなしに極力採録した。このように、本稿はある意味で初歩的なものであり、多くの名前が出てきて、関係がよく分からないなど、不明点も多く残った。したがって、これ以外の疑問点を含めて(?)として挿入した。また、インタビューでは、結婚に焦点を当てながら、同時に時代を逐って聞くつもりであったが、話が日本(統治)時代以前、日本時代、国民党時代、そして現在が錯綜し、わかりにくい。正確を期すためにも、再度、角板山を訪れ、和夫さん、緑さんにお聞きしたいと考えている。特に論文では、これらを時代順に並べ替え、構造的に推敲し、今後、文献史料を含め、研究内容を充実させていきたい。

一 和夫さんと緑さんの結婚した時の状況

菊池：お二人の結婚の時の状況をお聞きする前に、基本的なことが、何故、この辺を角板山と言うのですか。

和夫さん：これは日本人が命名したと思う。この辺の山を空から見ると、三角形をしている。それで、「角板山」と称したという。これが一般的に言われていること。もう一つの説があり、「角」という字を分解すると、「刀」と「用」という字になる。「刀（近代武器）を用いて」進入してきた日本軍に対して、「板」という字を分解すると、「木」と「反」になる。タイヤル族は日本軍に「木の棒（原始的武器）」で反抗した。だから「角板山」。

菊池：和夫さんは元来、部族長の家系ですよ。父親や祖父の話をお聞かせ願えますか。

和夫さん：私は泉民雄の長男です。泉民雄は台北一中（現在の建国中学）に日本人の中に一人だけ合格した。父は頭が良かった。成績は一番が日本人で、いつも二番だった。本当は父が一番だったかもしれない。一番が日本人でないとかつこがつかない、と学校側が考えたのかもしれない。父は卒業後、駐在所長になった。私の祖父は台湾の日本領有直後、一九一一年に枕頭山戦役（明治時代、一八九五年？）があった。枕頭の形をしているから枕頭山という。丁度、角板山の向かい側の山ですよ。「山の人」は降伏しない。この戦闘には「平地人」（漢族）は参加していない。タイヤル族以外、パイヤル族を含めて原住民はすべて降伏した。

菊池：枕頭山戦役とはどのような戦闘だったのですか。実態をもう少し詳しくお教え下さい。

和夫さん：枕頭山戦役では、タイヤル族は毒矢を使った。鉄砲では音がする。日本軍は馬に乗り、大砲を馬に乗せ、また鉄砲を担いで山を登ってくる。その進路をムササビの擬声を使って合図するのですよ。

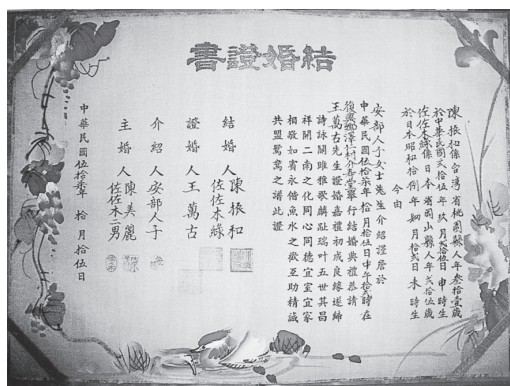


写真2

「フューフュー」、「フューフュー」とね。この戦闘で日本兵は一〇〇〇人中、六七二人（六六二人？）も死んだ。タイヤル族はいわばゲリラだから、七人しか死なない。タイヤル族は禪姿で、また、それを風呂敷のように頭にかぶって日本軍を襲った。だから、日本軍はタイヤル族を恐れた。「動物だ」、「野蛮人だ」とね。ただ、タイヤル族の方も流石に日本軍の大砲に

は驚いた。木がバタバタと倒れる。それで、タイヤル族側も枕頭山の稜線から逃れた。日本軍が白旗を掲げたところで、談判に入った。タイヤル族側で談判したのは林昭明の祖父ですよ。林昭明は私の祖母の弟の子供ですよ。日本人も悪いことばかりでなく、よいこともした。例えば、溪口台の水田は日本人が指導した。それ以前は焼き畑で陸稲を作っていたからね。ただし、日本人はよくビンタをした。これは悪いことだ。でも、死刑にはしなかった。これはよいことだね。

菊池：日本のタイヤル族政策はどうでしたか。

和夫さん：日本人はタイヤル族の一代目は反抗心が強いので、二代目を教育しようとした。「以蕃治蕃」で、いわゆる「飴と鞭」の政策だ。そこで、私の父民雄は台北一中に入学できた。

菊池：では、話を本題に戻しますが、結婚した時の状況はいかがでしたか。

和夫さん：緑は台湾に一回観光に来て、二週間で日本に帰った。

緑さん：その二週間の間に法院結婚(写真2)をしたのよ。和夫が「早く早く」とせかすから。

和夫さん：結婚しないと、手続きがとれないでしょう。緑が高校一年生の時から文通し、愛を確認していた。観光中に緑と初めて実際に会った。文通していた時は徴兵されて、軍事訓練を受けていた。軍服の写真を送ったから緑は職業軍人と勘違いしていたようだ。

緑さん：大きな新聞に皆、出たよ。どこで写されたかわからない。大きく写真が出たよ、私。観光で二週間来た後、一年後、再び台湾に来た。

和夫さん：法院結婚はあの時は少なかったから、新聞記者が沢山来た。だけど、私は相手しない。だから、記者が勝手に文章を作った。

……緑が台湾で和夫と結婚したという書類を日本の戸籍事務所に持って行き、日本から結婚したと言う戸籍謄本をもらってくる。それを持っていけば、台湾に住めるわけですよ。観光では期限があるし、結婚したら永遠でしょう。国際法では、敵と結婚しても大丈夫なわけですよ。中国人が日本人を嫌がっていたけれども、私は結婚した。

菊池：和夫さんと緑さんが結婚した時の状況についても少し詳しく教えてください。

和夫さん：私たちの場合、法院公証結婚でしょう。これは両親が承諾、許可しない場合、法院が結婚を許可するというものだ。

緑さん：私は最初、旅行で台湾来て公証結婚を申請した。民国五七年

現地調査：台湾桃園県復興郷角板山のタイヤル族(菊池)

(二九六八年)一〇月二五日に法院から公証結婚が認められた。それを持ち帰って日本で国際結婚の手続きをした。その後も手続きが必要だった。今度は入山証を獲得するため、專案申請をしなければならぬのよ。專案申請には入山理由と同居理由を書く必要がある。両親は反対した。結婚式には姉だけが来てくれた。その上、披露宴の時、台風で大変だったのよ。

和夫さん：緑が一時帰国した後は大変だった。外省人(周知の如く、蒋介石・国民党が毛沢東・共産党に敗北して台湾に逃れた時、大陸から台湾に逃れてきた人々で、各省出身者がいる)は日本人を恨んでいるからね。公安から呼び出された。「なぜ平地に住まないのか」、「台湾にも娘は沢山いる」とかね。「お金がないから、平地には住めない」、「恋愛、結婚に国は関係ないでしょう」と私は答えたよ。緑が「何故、無断で山に入れたのか」とかも聞かれたよ。本当は、山の下にある駐在所の人が見逃してくれたから入山できたのだけど、迷惑がかかるからそうしたことは絶対に言えないよ。……緑が観光できて、日本に帰った後、私は刑務所(警察や役所ではなく、刑務所?)に連れて行かれて尋問されたよ。桃園の刑務所ね。「おまえ、なぜ日本人と結婚するのか」と。そんなことをいったのですよ。だから、私は「結婚は国際法上、問題ないでしょう。結婚は国籍は関係ないでしょう」と返答したね。そして、「それはそうだけど、台湾に沢山いるでしょう、娘。それなのに、なぜ日本人と結婚するのか。台湾の娘では、何か問題あるのかな」と。

菊池：刑務所では拘留されたのですか。その日の内に帰ってこれたのですか。

和夫さん：うん。もちろん結婚は国籍、政治に関係ないでしょう。愛

があるから。向こうも「それはそうだけ」と言ったよ。……緑は台北の飛行場で降りて、角板山に入ってくるでしょう。強引に結婚したでしょう。この日本の女性は私の家を見たい、と。当然でしょう。主人がどのような所に住んでいるのか、どんな生活をしているのか、家を見たいと。「駄目」と言ったよ。「あなたの住んでいるところは特別管区のことですよ。あらゆる外国人は入れない。台北ならかまわんよ」と言うでしょう。それなら、「私らは結婚したのになりますかね」と聞いたよ。そしたら、「あんたら、平地に来たらよいでしょう。山を下りて、台北に来て、平地に住んだらいい」と。馬鹿野郎と思ったね。それで「私はお金がない。平地に家を買うのは大変ですよ」と答えた。ここに、外省人で、総統の弟子が主任をしていて、それが友だちだった。彼が「話をつけてくる」と言ってくれた。ここに入るには、「入山証」というのが必要だった。台湾の人でもいるんだよ。外国人に対してはもつとうるさい。……ここは角板郷に住人だけは入ってきていい。復興郷以外の人は「入山証」がないと、入れない。……緑が観光旅行できた時は、「入山証」がないでしょう。それで、困ったなあ、と。それでも、連れてきたよ。……もつとも今は自由に誰でも入れるけどね。

菊池：緑さんは先にすでに入ってしまったわけだ。

和夫さん：そう、山に入るところに警察署（駐在所）があつて警察官が友だちでしょう。和夫が日本人と結婚したこと、皆、知っているし、「どうぞ、どうぞ」、「どうぞ入ってください」ってね。それで、入れたんだ。そして、私の家に住んでいたでしょう。そしたら、刑務所から呼び出しが来た。つまり、私の家に住んで、一旦日本に帰ったでしょう。刑務所の人は、「入山証」があるのに、なぜ黙って入ったのか、「これは

法に違反した」。「どうやって入ったのか」と言われたよ。入山の所にいる友だちの警察官に迷惑をかけるわけにはいかない。そこで、裏の小道から黙って入山したと嘘を言った。許可はないけれど、少し私の家を見たいというので入った。それで、罰金をとられ、この警察官も調べられた。「どうして、入山させたのか」とね。警察官は「知らなかった」。

どこから入ったのかも知らない」と一貫して答えた。そうしたら「日本人が（山に）入っているのに、どうして分からないのか。何をしている」と言われたそう。ここで、緑は何日か泊まったしね。警察官は懲戒され、一年間のボーナスがもらえなかった。

菊池：当時、和夫さんは公務員で水道局に勤めていたのですね。

緑さん：そう、何年何月何日に何をしたらというふうに記録に残る。だからボーナスに影響したよ（和夫さんのボーナスにも影響が出た?）。

菊池：個人档案に残るわけだ。

和夫さん：だから、後で、友だちの警察官に言われたよ。あんたのせいで罰をうけたよ。私の服務成績は「甲」のはずが、「丙」にされたよ。……結婚した後、私はまた刑務所に行った。「結婚しました」、「日本の戸籍が台湾に来た、日本の許可がとれた」と言いね。また、山地に入つてはいかん、平地ならば台北か、桃園か、中壢か、どこでもいい。そこで生活しなさいとね。それで、「平地は地価が高いし、そんな家を買う能力もない」、とまた答えたよ。そしたら、外省人で、総統の弟子がね。ここにおったんですよ。私は、彼を警察署に連れていったよ。彼が警察で言ってくれたよ。「この山の青年は特殊管区に住んでいる。結婚した。どうして妻と一緒に住んでいけないのか」。刑務所の偉い人、ここに住んでいた人ね。昔、中国大陆で警察学校で同学だった。

彼が、「刑務所の偉い人、おりますか」と聞いた。そしたら、「おります」と答えた。そこで、「会いたい」と言って、彼ら同士、会った。「おう、もう久しぶり」と偉い人が言った。「どういうことですか」と聞くので、私が経緯を説明した。「おう、そうか。あんた、専案申請をしない」と言った。

菊池：難しい言葉が次々出てきますが、専案申請とは何ですか。

緑さん：世界中、こんな国（台湾）は見たことはない。

和夫さん：抜け道はあるのだよ。ただしそれをなかなか教えてくれない。専案申請とは、法律的には、入山理由を書けと言うことですよ。これを教えてくれたことは、親切ですよ。「私は日本人女性と結婚しました。私の住んでいるところは入山証がないと、入れないところです。結婚は同居する義務がある」と書いた。偉い人は「もう少し早く言ってくればいいのに」と言っていた。それまで、偉そうに言っていた人は低い地位の人で、偉い人が言う、「ハッ、上官わかりました」と言っていて解決した。私を連れていってくれた人は私の昔の同学ですよ。……結婚式は法院でしたけれど、披露宴は二十何卓で角板山でやったよ。丁度、台風で、暴風雨だった。

菊池：それは、建物の中ですか。

和夫さん：もちろん建物の中だよ。「活動中心」（公民館のような所）で、何十卓置けるところで式を挙げた。緑は日本の着物を着て、私は背広を着てね。緑のお姉さんも来てくれたよ。お母さんは、台湾に行くお姉さんを見送りにきたようだよ。こちらから大溪への道は、台風で崩れて、寸断され、車も通れない。結局、親戚や友だちは皆、結婚式に参加できなかった。「二十何卓もご馳走を用意したのに誰も食べにこれな

い。どうしようか」と思った。実際はむしろ足りないくらいであった。結婚したら、知り合いや親戚に「赤紙」（招待状）を送るでしょう。お祝いの通知ですね。ここに住んでいる人、知らない人も皆、来たんだ。なぜ来たかと言えば、緑を見に来たんだ。私は通知を出していないよ。それでも、皆、お金を包んで来たよ。

菊池：双方の両親の反対しませんでしたか。

和夫さん：私の方の親戚は歓迎したけど、緑の親戚は反対したよ。それで、大変だ。だけど、緑は強い。それでね、大溪のバス駅に新聞記者が来た。尾行されたよ。「あなた、日本人と国際結婚した人でしょう」。

「何故あなたはこの人と結婚したのですか」、「ロマンスを教えてください」。ってね。新聞に出すわけだ。でも私は何も答ええない。うるさい。そこで、記者は勝手に「私は山の青年で、貧しいかもしれないけれど、緑が『主人が貧乏でもいい。愛の力で、私はここにお嫁に来た』と言ってゐる」と文章を作ったよ。

菊池：すばらしいですね。

和夫さん：いや、これは新聞記者が勝手に作った話ですよ。向こうが自分で作っているんだ。緑が、「北京語でこういう言葉がある、『犬にお嫁に行ったら犬になり、鶏にお嫁に行ったら鶏になる』」と話したなんて、嘘ばかり書いている。あの時、タイヤル族の人と日本人との国際結婚は少ない。だから、面白い記事になると思って、新聞記者が来るんだよ。今は、タイヤル族の誰かが日本人と結婚しても記事にしない。もちろん芸能人が結婚すれば、記事になるだろうが。……あの当時、台北の人と日本人が結婚したら、あまり騒がれなかった。特に「野蛮民族」の「山の人」と日本人が結婚する例は少ない。だから騒がれた。こうした

難しい時期に緑は来た。

菊池：緑さんの両親はなぜ反対したのですか。相手の和夫さんがタイヤル族だからですか。

緑さん：違う。ベトナム戦争が何年も続き、台湾が米軍の兵站基地になつていたのでしょう。ベトナムに行くアメリカ人が台湾に沢山いたのよ。私の家族、兄弟はベトナム戦争のことを心配した。台湾は、言葉の面では日本語がある程度、通じるからよいけれど、あの時代、ベトナム戦争が長く続いていたら心配したのよ。

和夫さん：台湾はベトナムに近いでしょう。アメリカ兵が台湾に休息し、「女遊び」に来るんだ。ただし、角板山には入ってこない。ここに入ってくる人は、中華民国政府の関係者でずつと来ていた。

緑さん：当時、日本ではタクシーはクーラーがあつた。台湾のタクシーの窓ガラスが割れている。それが普通だった。日本でもタクシーのクーラーはそれほど早いものではないけどね。そうした中を姉さんがくれた振り袖を着ているしね。車もエンストするし……振り袖も埃だらけ（最初の観光旅行の時？ 披露宴の時？）。

和夫さん：結婚式は九月末で、タクシーで桃園から台北に行った。最初はお姉さんと一緒に来た。タクシーは大体、四人乗りね。前一人、後は三人乗れるでしょう。私ら全員で三人しかいない。当時のタクシーは四人満員でないと、走らない。「ちよつと待て、ちよつと待て」と警察官が来た。駅その場所を客を乗せてはいけないところだった。警察官が来たので、タクシーは慌てて前進した。その時、ドアをバンと閉めたら、元々がヒビが入っていたから割れてね。タクシーは警察官が来たので、駅から離れた所に前進してね。運転手が私たちに向かつて「早く来



写真3

なさい、早く来なさい」って。例えば、一人乗ったら百円とすると、四人で四百円でしょう。三人では三百円にしかならない。昔は一人ずつとるからね。そこで、仕方がないので、私が「四人分払うから」と言ったら、やつと発車した。

菊池：今でも台湾の田舎では、タクシーは次々と乗せますよね。メーターで私が乗っているにもかかわらず、次々乗って降りて。そして、私はメーター分払わされて、後で乗ってきた客からもどういう計算か分からないけれど、金をとつていた。

和夫さん：今は、台北市内は全部メーターで、他に客を乗せたりしないでしょう。

緑さん：次々と客を乗せるのは合理的といえ、合理的よね。特に高速度路なんかは四人乗らないと、もつたないからね。

菊池：結婚式の写真はありますか。

和夫さん：あるよ。ちよつとまつてて（写真3）……。

緑さん：当時は「骨皮筋右衛門」で、主人は痩せていたよ。

和夫さん：それは、あんなのために苦労したからじゃないか。結婚でいろいろ大変だったんだから。

緑さん：あの時、日本人は朝日新聞社の記者を含めて三〇人くらい来たが、話さなかった。

和夫さん：あの時はボロボロだったからね。……結婚後も、毎日忙しかったよ。「山の人」が、皆やって来る。日本の女性はどの、この、「綺麗ですね。可愛いですね」って言いに来たよ。

二 結婚後の山での生活と習慣の差について

菊池：山に来て習慣の違いはなかったですか。

緑さん：人は人、自分は自分。こちらの野菜の炊き方はいろいろあるけど、私は自分の炊き方をした。でも、いろいろな習ったよ。

和夫さん：私の母は若い頃、日本時代、日本人と一緒に生活したでしょう。だから、日本の習慣もよくわかってるから。味噌汁なんかもね。緑が来たばかりの時は優しくかったけど、後はもう……。

緑さん：私、最初に台湾に来た時、日本人のおばさんと一緒に来たから言葉も通じるしね。

菊池：本当のおばさんですか。

緑さん：いや、「満州国」で学校の先生をしていた方で、終戦で引き揚げてきた。

菊池：では、北京語ができるのですか。

緑さん：少しはできると思うけれども、満州は日本よ。だから、満州はほとんどが日本語。だから、三郎（日本人のおばさんの子供？）なんて、日本語がとっても上手。

和夫さん：彼女は中国の社会を少し認識している。……だから、中国

現地調査：台湾桃園県復興郷角板山のタイヤル族（菊池）

共産党に負けて、蒋介石が台湾に逃げてきた時、一緒に中国人でも満州から逃げてきた人は日本語がべらべらだった。あの人たちは共産党ではなく、国民党らしい。

菊池：緑さんが来た後は、警察などから呼び出しはないですね。

緑さん：私は呼び出されたことはない。

和夫さん：緑を呼び出してどうするの。台湾は、日本と国交を結んでいたし、外交に影響したら困るでしょう。

緑さん：台湾には日本の大使館があった。田中角栄首相の時、変わった。

和夫さん：日本は中国と国交を結び、台湾を捨てた。だから「交流協会」（当時は亜東協会）になった。今、日本大使館はない。日本にも中国の大使館があった。

菊池：いろいろと苦労しましたね。

和夫さん：大変だったよ。

緑さん：同じ国で、同じ国民でありながら、ここ（角板山）はストッブされている（隔絶されている）のよ。

和夫さん：蒋介石の別荘が特別区だからここにもあった。同時に、一般の「山の人」の山地郷でしょう。「山の人」は少し文化が低いと思われて平地人から騙される。こうして、平地人が山に入って来て、「山の人」の土地を平地人が奪った。習慣が違うので、「山の人」は困る。だから、入れないようにする。ところが、山には蒋介石の別荘（貴賓館）があるのでとりわけ厳しい。暗殺されたら困るからね。蒋介石総統が来たら、角板郷の住民は全部で二〇〇〇人くらいだけど、ここ（和夫さんの家の近くは小さな商店街・市が形成されている）に買い物に来るで

しよう。当時、検査され、身分証がないと入れない。……ある時、蒋介石が陽明山を自動車で通った。その住民は道の脇をトイレにしていた。そこで、大便をするため、しゃがんでいた。ところが、そこに總統の自動車 came。前奏の自動車に乗っている警備員、弟子、警察官は皆、ピストルを持っている。急に人が立ち上がったので、「危ない、總統が暗殺される」と考えて、皆、「パン」とピストルを撃つたよ。その人は、死ななかったが、重傷であった。總統が行くところは、安全のため、保護をするからね。その後、その人は尋問された。「總統の車が来たので、驚いて、失礼になると思っ立ち上がった」と言ったそうだよ。

菊池：緑さんは台湾に来る前、台湾について予備知識はありましたか。

緑さん：台湾の友だちがいるから、いろいろ聞いたよ。

菊池：台北にいる人などからですか。

緑さん：違う。日本国内に私の知り合いの台湾人がいた。いろいろ聞いたけれど、話はあくまでも話よ。実際に眼で見ないと分からない。

和夫さん：平地に住んでいたら問題はなかった。ここは特別区だからね。

緑さん：そうしたことは全く知らなかった。台湾は薩摩芋のような形をした小さい国よ。日本人など外国人が山に入ることは想定してなく、それに対応する法律がなかった。法律がないけれども、いわば私は法律を破ったことになるわけよ。変でしょう。私は変な国と思った。同じ国なのに国民が入っていけないところがあるなんて。

和夫さん：だから専断申請が必要になる。……緑が逃げ出したら困る

と思っ（「変な国」と言うことを）隠した。それで、子供ができた時、台湾は「こんな国」だっって初めて話したんだよ。

菊池：緑さんのご両親はどのくらい台湾のことを分かっていましたか。

緑さん：山の民族のことね、私、年寄りから聞いた話だけど、「台湾征伐」の時、日本から優秀な人が来てるのよ。タイヤル族は優秀だから日本からも優秀な人が来てるのよ。

和夫さん：ここにいるのは「野蛮人で、人間ではない」。だから、「征伐する」と。戦っただけでもタイヤル族は日本軍に負けた。

菊池：この人々とのトラブルはありませんでしたか。

緑さん：「山の人」ではなく、外省人と矛盾があった。私、日本人だと言うことで、外省人から責められた。中国大陸から来た人に、足や背中を見せられて、「日本人にやられた、まだここに怪我の痕がある」と言われた。そういう人がいたよ。今は亡くなって少なくなった。でも、私が戦争に行っただけでもないし、そのことで責められても……。

和夫さん：戦争中の話だ。大陸で外省人は日本軍の捕虜にされて殴られた。第二次世界大戦の時、日本軍は大陸で占領したでしょう。彼らは日本人から叩かれたり、殴られたりして、怪我をしてね。恨みがある。

しかし、緑は二、三歳、私は七歳。戦争のことなんて分かるものか。

菊池：蒋介石と来たわけでしょう。この辺にそんなに外省人が多かったのですか。

緑さん：多かった。

和夫さん：二〇〇〇人くらい（一般の外省人というより軍関係者・兵隊？）。

緑さん：昔はこの国とも、朝鮮とか、中国大陸とか、いろいろもめたことは歴史で習った。私もそんなに詳しくは知らないけど、お互い様、あの時代。一時はコリアね、今でももめているけど、私の知っているコリアの人もいい人もいたよ。私の両親なんかもね、「いい人もおるよ、朝鮮人」と言っていたよ。でも、一般的に言えば、日本と朝鮮は歴史的に難しいね。……台湾のテレビで戦争のドラマなどで、出てくる日本人の名字が「佐々木」がなぜか多いのよ。私の姓は「佐々木」でしょう。「佐々木小次郎」以外にも、「佐々木」という名字がよく出る。

菊池：日本人の代表みたいに使われるのですか。

緑さん：「佐々木小次郎」は台湾でも有名で、いろんな話、悪い話でも「佐々木」が使われる。

和夫さん：外省人が台湾に来た後、テレビで日本人が中国大陸でしたことが放映された。

菊池：閩南人とは問題はありませんでしたか。

和夫さん：私の家なんかね、日本人が来る前、平地人、特に閩南人とは戦争だよ。

緑さん：閩南人とは敵同士だった。

和夫さん：平地人は皆、敵だった。客家も同じで、山に入ってきたら殺す。逆に、「山の人」が平地に行くと、殺される。双方の間に境目がある。山の地盤と平地の地盤、そうした境がある。その境で戦争をする。

菊池：客家とは矛盾がありましたか。

緑さん：少しあるよ。客家はとても団結している。客家は人口的には少ない。客家はケチで、一円でも節約する。

現地調査：台湾桃園県復興郷角板山のタイヤル族（菊池）

菊池：そうでない人もいますね。

和夫さん：客家は貧しかったから一般的にケチ。福建省南部から閩南人は四〇〇年前に来た。閩南人は台湾に来たのが早い。だから、良い平地を獲得した。客家は後から来たから平地と山との間、丘陵地帯に来た。それより奥に入ると、「山の人」がいて衝突する。でも、「山の人」と接触する機会が増えた。客家は口がうまく、「お願いします」など、低姿勢だね。以前は、冷蔵庫もなかったでしょう。そこで、客家は「山の人」に「塩漬けの魚、あるいは餅をあげるから」とおべっかを言いに来る。だけど、「山の人」から見れば、やっぱり「おまえは平地人で、外来人だ」と始めは衝突するでしょう。そうしたら、客家は「私の小さい子供をあげます。あなた、子供いないでしょう」と「山の人」に子供をあげる。いわゆる養子縁組ですね。そうすると、親戚になるでしょう。この後、「お願いします。山に入らせてくれ」と言われると、「山の人」も親戚だから断り切れない。「土地貸してくれ」と言われて土地を貸した。こうして、客家はだんだんと山に入ってきた。山には塩がない。そこで、客家は「塩をあげる」、「マッチがないの、マッチをあげる」、こうして入ってきた。もちろん山には、塩の代わりになるカブラのようなものがある。そうした植物の葉を絞ると、塩のようになる。ただ山には海塩がない。平地人には海がある。客家が塩を持つてくると、「山の人」は地代はとらず、塩と交換で土地を貸す。こうして、だんだんと入ってきた。客家は平地に降りると、閩南人と衝突する。客家からみれば、山を下れば閩南人、山に登れば「山の人」でしょう。挟まれているから、「山の人」におべっかを使っただ方が有利だと思ったのでしょう。私の祖母は龍潭の客家だったけれど、この時も祖母が子供の

時、タイヤル族に養子に出された。だから私には少し客家の血も入っている。

緑さん：私が来る前のずっと昔の話。

和夫さん：そんな昔の話じゃないよ。もう日本人も入ってきた後だから。

菊池：タイヤル族と他の原住民との間に矛盾はありますか。

緑さん：タイヤル族は顔の色も白い。それに対して南部の原住民は背が小さくて、腹が出ていて、色が黒い。台湾の原住民もいろいろだよ。言葉も多い。

和夫さん：そして、彼らは目玉が白い。民族が違う。インドネシアやマレーシアから来た。日本時代、台湾アミ族、プヌン族などはなく、原住民の総称が「タイヤル族」だった。つまりタイヤル族が「山の人」の代表であった。黒い人間は「土人」と言われていた。日本との戦争の時も他の民族はすぐに降参した。だけど、タイヤル族は優秀な民族で、「自分の土地を死んでも明け渡さない」、「負けても嫌だ」、そうした精神がある。そして、日本軍と最後まで戦って負けた。

三 「蕃刀」と入れ墨

(一) 「蕃刀」

緑さん：タイヤル族は「首をとる民族」だよ。日本人の首を相当とつた、ナイフだね。

和夫さん：ナイフではなく、「蕃刀」。

緑さん：大きくて、いわば鎌と同じよ。日本刀は長い。「蕃刀」は短



写真4

いている)。

菊池：「蕃刀」はどの位の長さがあるのですか。

和夫さん：蕃刀は四〇〜五〇センチくらい。日本刀は両手できるときょう。蕃刀は片手でいい。頭の髪の毛つかんで、サツと切る。切れる。

緑さん：猪でも格闘して射止める民族なのよ。

和夫さん：山に狩りに行くと、まず犬を先に行かせる。犬は速度が遅いけれど、持久力がある。猪は猪突猛进でしょう。猪は猛スピードで逃げるが、持久力がない。そこで、猪は弱ると、犬を待って反撃しようとする。だが、犬に吠えられている間に、人間が到着する。猪は人間に突進してくる。猪の頭は尖っている。蕃刀でも頭蓋骨を刺すことはできな

いけれど、パツとやると、首がポンと落ちるそうよ。そういう民族よ。台中の「九族文化村」に行ってみたらいいと思う。タイヤル族は、頭を沢山並べている(その後、すぐに「九族文化村」に向かった。模造品の頭蓋骨二〇〜三〇個が棚に展示されていた(写真4)。なお、台湾原住民は「九族」と言われていたが、現在も「八族」、「一〇族」、「一二族」など論争が続

い。だから、下から胸をねらい、心臓を一撃する。正確に刺せないとい、人間の方がやられる。特に猪の雄は牙があるからね。

菊池：雌は大丈夫ですか。

和夫さん：雌は咬む。咬まれたら、骨まで折れてしまう。だから、雌も恐ろしい。そこで、一発でやらなくてはならない。心臓ではなく、腹を刺したら大変だよ。暴れて、猪が死ぬ前にこちらがやられてしまう。

菊池：「蕃刀」は戦争の時も使用したのですか。

和夫さん：日本軍がインドネシア（ニューギニア？）で戦った時、高砂義勇隊が召集されたでしょう。当初、父は警察官だったので、兵隊に行かなかつた（警察官は兵隊にならない規定があつた）。戦争末期になると、五十数歳でも召集された。私あの時、「エーカー」、「オクダン」（漢字地名は？）にいたでしょう。あの時、何歳だったかなあ。道に皆、並んでね。「頑張つてよう」、「勝つてきてよう」、と奥さんや子供が日本国旗を持つて見送つた。私も日の丸を持つてね。その時、ドンファアの派出所にいた父はそこで見送りを指揮した。あの時、姉と高夫と私とトシがいたが、ボインはコウビで生まれた。……南方戦線に行つて赤痢など病気で死んだのもおるよ。日本の兵隊は食べ物が合わない。食べ物が無い。「山の人」が助けた。「山の人」が山（ジャングル）に行き、山豚の糞を仕掛ける。それを日本兵に食べさせたが、それでも食糧が足りない。「アメリカ兵」（オーストラリア兵？）の捕虜の首を日本刀で落とす。日本人が「日本刀が強いが、蕃刀が強いが」競争しようと言つた。日本人が双手で日本刀を握り、切つたが首が落ちなかつた。今度は高砂義勇隊が使用して「蕃刀」で、「捕虜の首をとれ」ということになつた。片手でサーとやると、首が落ちた。やはり「蕃刀」が強

現地調査：台湾桃園県復興郷角板山のタイヤル族（菊池）

い。刀身が短かく、あとは技術の問題。今度、食糧足りないものだから、「山の人」が「山肉」と「アメリカ人捕虜」の肉を混ぜて炊いた。人間の肉だよ。日本兵に喰わせたそうだよ。「山の人」はこの肉が何の肉か知っているから喰わない。日本兵は知らない。……結局ね、日本は負けた。南方戦線に角板郷だけで四百何人が行つたが、帰つてきたのは百人弱だった。私の母の弟も行って遺骨で戻つてきた。

菊池：「山肉」とは何ですか。

和夫さん：「山肉」とは、山豚の肉、鹿の肉など、山で採れる動物の肉のことだよ。「山の人」は糞を掛け、鹿も採る。日本兵は糞のかけ方を知らない。兵隊多いから「山肉」だけでは足りない。腹が減ると、「アメリカ兵」で死刑にされた人肉でも何でも喰うよ。だけど、後で、「アメリカ兵」の肉と知つて、日本兵は、皆、吐きだしたそうだよ。「山の人」は「おまえらは何もできない。山肉も採れない、猪も捕れない。アメリカ兵の肉でも喰う」、と心の中で笑つていた。南方戦線に行つた時に、そういう話があるんだ。……高砂義勇隊は（戦闘の時も）もちろん先頭をきつた。日本兵は後ろで「やれ、進め」と命じるでしょう。でも、死ぬのは日本兵が多い。アメリカの大砲は後ろに飛ぶ。前の方がむしろ安全だった。

（二）入れ墨

菊池：タイヤル族の入れ墨は有名ですね。

和夫さん：そう、男は額と顎。女の場合、顔一杯に入れ墨をするから「お化粧」みたいでしょう。入れ墨がないとお嫁にいけない。

緑さん：娘は一四、五歳で入れ墨を入れた後、結婚する。

菊池：入れ墨は痛くないのですか。

和夫さん：それは痛いよ。転がり回るほど痛い。入れ墨を入れるのに、一カ月もかかる。以前は煙突には黒いススが出るでしょう。それを塗って針で刺す。女は入れ墨の範囲が広いから大変だよ。刺すと、腫れるけれど、薬もないよ。

菊池：入れ墨は誰がするのですか。専門家がいるのですか。

和夫さん：そうそう。林昭明のお母さんみたでしょう。入れ墨してたでしょう。

菊池：九五歳の誕生日に出席した。八〇人くらいが出席していた。緑さんもその時、いたでしょう。その他、緑さんには工場でも会っていませんから、今回で、すでに三、四回お会いしていると思います。記憶にありませんか。和夫さんとも会っている。

和夫さん：林昭明のお母さんは一〇〇歳で死んだ。

菊池：なぜ、女の方が入れ墨の範囲が広いのですか。

和夫さん：苦勞しても耐えられるようにだよ。

(三) その他

菊池：タイヤル族は病氣や負傷した時、それまで、どうしてたのですか。

和夫さん：巫婆というのがいた。病氣を治す。お礼に物を贈る。一回で病氣を治さず、何回も来ると、物を多くもらえた。占いもする。アニミズムかな。

菊池：アニミズムと言うより、シャーマニズムでしょう。

緑さん：私も巫婆を見たことがあるけど、入れ墨をしているし、怖い

感じがした。

菊池：その他、驚いたことなどはありますか。

緑さん：「山の人」は当時、まだ裸足の人がいて、足があまりに大きくてあまりにも広がっていて、指も開いていて驚いた。まるで鶏の足みたい。「山の人」は靴を履かないから足が大きい。私が台湾に来た時、そんな人がいたよ。一番年寄りのおじいさんがそうだった。びっくりしたよ。でもじろじろ見たら失礼でしょう。それほど大きくない人もいたけど、一般的に大きい（女の足は大きくないのか？）。

和夫さん：日本人が、皆、角板郷の頭目を皆、集めて、日本観光に連れていった（日本統治時代？）。それまで、裸足だったでしょう。それに、無理に靴を履かせて。足が大きいから。それに皮が厚い。山に登るでしょう。普通の足では山に上がれない。山羊の足みたいに開くとあがりやすい。崖でも登るし。開いているでしょう。幅はもちろん広い。だから、靴が入らない。まあ、足袋なら無理をすれば入る。足が大きい人は、沢山いたよ。私の祖父の弟は怠け者だったためか、それほど大きくなかった。

菊池：さきほど昼食の時、タイヤル族の家庭料理である山菜料理と共に出してくれた五センチ位の魚は何という魚ですか。

和夫さん：あれは「生蕃鯉」といって清流にしか住まない魚です。口は大きい。鮎と同じで、細長いコケを大きな口で吸い込むように食すのですよ。最大で三〇〜三五センチくらい。台風や大水でコケがなくなるのと、ミミズや虫でも釣れる。日本領有初期の頃、「山の人」（タイヤル族などの原住民）は警察官を偉い人と思っていた。そこで、日本人の駐在所長にこれをご馳走すると、「美味」と言い、「珍しい」と言う。所長は

釣ろうとするが釣れない。網や槍でもとれない。ついに所長は怒って「思うように釣れない。言うことをきかない生蕃と同じだ。これは生蕃鯉だ」といった。それ以来、この魚を「生蕃鯉」というのですよ。……本当はね、パンでも釣れるのですよ。当時はそのことがわからなかった。今のようにパンもなかったしね。今は、皆、パンで釣っている。

四 緑さんの山での生活

菊池：山での生活を実際にしてどうでしたか。結婚した時は電気はありましたか。

緑さん：ここにはテレビがあった。電気はここまで通じていた。けれど、ここから奥はない。皆、蠟燭がなかったら、カンテラだった。バスも車内を真っ暗にしたまま走る。ここから奥は真っ暗。怖かったよ。そのくらい、日本より遅れていた。

菊池：カンテラ生活はしたことがありますか。

和夫さん：復興郷は広い。ここから三、四〇キロの奥まで復興郷だからね。(復興郷の)三光には電気がなかった。

緑さん：三光はガス、水道は通じていたけど、電気はまだで、カンテラだった。私、薪取りを土曜、日曜にやった。風呂は薪で焚いた。ご飯でも野菜でも薪で焚いたよ。お風呂も湯船がなかった。

和夫さん：その後、何年も経たないうちにガスが入ってきた。あの時は、日本よりも一〇年くらい遅れていた。日本も以前は薪でしたよね。日本がガスになって、台湾は一〇年後になってガスになった。

緑さん：薪はいいけどね。クーラーはないとね。ここでもかなり暑い

し、日本に比べると、湿度も高いから蒸し暑い。

菊池：一般家庭にクーラーが普及したのは日本でもそう昔のことではないですよ。急激に皆、クーラーをつけましたけどね。

緑さん：こんな笑い話がある。中国人(蒋介石ら外省人)が台湾に来た時、台湾は中国より発達していたでしょう。壁に蛇口をね。……

和夫さん：そうそう、これは本当の話だよ。中国大陸から国民党が台湾に来たでしょう。私の所に兵隊さんが来た。中国大陸では井戸水や川の水を運んだ。深い井戸を掘ってね。水道がない。台湾では壁に蛇口がついていて、ひねると、水がジャーと出る。その水は壁から出てきたように見えるでしょう。そこで、国民党の兵隊が蛇口を買いに行った。そして、壁にとりつけたが、水が出ない。「どうして水が出ない」と怒ったそう。

緑さん：そのくらい、中国は遅れていた。

和夫さん：私はそれまで大陸がかなり発達していると思っていた。戦争も強かったし、日本に勝ったしね。中国大陸はそれほど遅れているのかと思つたよ。蛇口に水道管がつながっているのは常識でしょう。この話は五〇年以上も前の本当の話。

和夫さん：私の父は、私が結婚する前、亡くなった。緑の母は健在だった。生きている時、台湾は戒厳令時代で会いに行けなかった。特に公務員は行くことができない。蒋介石が存命の時に行けなかった。戒厳令が解除(一九八七年)されてから日本に行った。その時は緑の母は死んでいた。台湾にいる外国人は行ける。だが、台湾人は行けない。だから緑の岡山の里にも行けなかった。蔣経国が総統になった時、解除された。だけど、解除されても、特に軍人、警察は外国に行けない。一般公

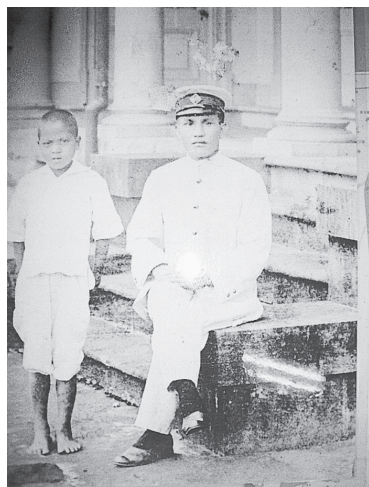


写真5



写真6

務員は行けるようになった。それで、初めて日本に行った。韓国に行つてから日本の名古屋にまず行つた。その後、緑の岡山の郷里に行つた。ここより田舎なので驚いた。農業をやっていた。

緑さん：この話は、もう二〇年以上も前の日航機が落ちた年。お盆で八月の半ば頃でしょう。

和夫さん：これが日野さん。これが私のお父さん。日野さんは私の父の伯父さん。この時は、日野さんはお医者さん。この頭が大きいのが私。大きい下駄をはいてね。四歳か三歳かな。これが私の姉さん。これが郷長さんをしていた高夫。これが母。これが和子。当時は和服を着ていた。浴衣ですよ。これが三光の駐在所。高夫はそこで生まれた。私はここで生まれた。姉さんはハブで生まれた。駐在所の警察官は転勤するでしょう。母は学力はないけれど、綺麗だった。だから、父は惚れこんだんだ。タイヤル族に和服を着せようと思っても簡単ではないよ。父は警察でしょう。もちろん日本人警察官と一緒にだから、日本語を話してい

もっていません。当時は、写真を撮る資格はありませんでしたよ。

緑さん：優秀なお父さん（和夫さんの父）だったのに若死にして⁽⁴⁾。

菊池：四四歳でしたっけ。

和夫さん：私の父は演説する時、書いたりしない。題目をくれたら、すぐに演説できる。だから、父は国民学校の家長会の会長でしょう。いつも「泉さん」と慕われて、父が演台に上がって日本語で演説する。私は国民学校の一年生。あの時は、父はまだ北京語ができない。蒋介石の軍隊がもう来てたよ。だから、その後、私から一生懸命に北京語を習った。父から「本気で教えてくれ」と怒られたよ。父が、日本が負けた後、今度は中国政府（国民政府）になったでしょう。中国政府はすぐ選挙をしないで、父に県会議員になるようにと言った。こうして、第一回目の新竹の県会議員になった。議員は演説しなくてはならないでしょう。演説できない議員がいる。「泉さん、ちょっと演説原稿を書いてくれ」って頼まれていた。父は勉強しないでも、頭が良かった。父は生き

るでしょう。私はタイヤル族の言葉を二七歳から習った。父が死んでから習った。以前は日本語。タイヤルの警察署の門のところ撮った写真。珍しい写真でしょう（写真5、写真6）。これは皇太子時代の昭和天皇だよ。父が皇太子と話をしている。

和夫さん：私と弟は三歳の差。

緑さん：主人の兄弟は、皆、背が高いのよ。

和夫さん：一七七センチ。若い頃は一七八センチだったけれども。こうゆう写真は一般民衆は

ていたら、九六歳になる。あの人（林昭光。林昭明の兄）は八三歳。父とは従兄弟。父の兄とあの人の父は二歳差。父と父の兄は一〇歳の差。その中間に女がいたが、死去した。父が末っ子。身長が六尺。英雄だ。

菊池：日野（名前は？）さんについて教えてください。

和夫さん：日野は独自に医学教育を受けて医者となった。日野の奥さんは日本人だ。台湾の日野さんの奥さんを日本で選ぶ時、□□（録音不鮮明）が「誰かお嫁に行きたい者がいれば、手を挙げてくれ」と言った。台湾の何族かも分からない。台湾に来たこともない。一番後ろにいた女の人が「私が行きます」と言っって手を挙げたらしい。度胸があった。その人が日野さんの奥さんになった人。奥さんは、日野がいる時は大人しかったが、日野が不在だと、使用人につらく当たった。私の母が日野さんのところに行っって、お手伝い、料理や掃除などをしたが、日野さんの奥さんは「山の人」を無視する。夫は「山の人」なのに、日野さんの親戚が来たら、「掃除が終わっっていないから掃除して」とか、これやれ、あれやれと命令する。とにかく人使いが荒い。日野さんはそれを知っって怒り、奥さんをビンタした。そうしたら、奥さんは「すみません」「すみません」と必死で謝った。けれど、その後も使用人に対する態度は変わらなかつたらしい。精神が不安定だったのかもしれない。だけど、二人の間に生まれた子供は皆、頭がいい。国民党が来た時、日野さんが捕まえられたでしょう。

菊池：日野さんの妻はお嬢さんだったのですか。育った家庭環境はわかりませんか。日野さん以外のタイヤル族に差別意識があつたのかもしれない。

和夫さん：日野の妻の育った家庭環境についてはわからない。出身は

現地調査：台湾桃園県復興郷角板山のタイヤル族（菊池）

九州の佐賀県。

菊池：日野さんが蒋介石に処刑された後、奥さんはどうなったのですか。

和夫さん：日野さんが死刑にされた後も、四人の子供とここにいたよ。四兄弟とも高等教育を受けた。長男の茂成さんは台北一中（今の建国中学）を出ている。明日、行こう。今は体が良くない。農業をやっている。彼も外省人になり痛めつけられた。二番目は日本で医者になったが、今は認知症になつていて。学校の先生をしていた三番目は死んだ。四番目の一番小さいのは、私より二歳下で、台北医大で医者をしてたが、もう引退したかな。明日行く人は、日野さんの長男で、茂成さん。家は三光の向かい側にある。高夫はあそこで生まれた。私は角板山で生まれた。菊池先生、明日起きて朝御飯を食べたら茂成さんの家にバイクで行こうね。

五 林茂成氏と林昭光氏

和夫さんのオートバイの後ろに乗り、林茂成氏（七七歳）の自宅を訪れた。細みの軀で、優しい感じのする老人であつた。丁度、林昭光氏（林昭明の兄。八五歳）が来ていた。和夫さんによると、林昭光氏はタイヤル族の最も古い歴史を知り、語ることのできる数少ない残された一人と言う。

和夫さん：彼は日野さんの長男で茂成さん、

菊池：和夫さんにも入れ墨について聞きましたが、関心があるので詳しく教えてくださいませんか。

林茂成氏：入れ墨は台湾原住民の中で、タイヤル族のみである。男の場合、唇の下の入れ墨は成人（成人は一五歳？）した時に入れ、額には「敵」二人（他の少数民族、平地人、日本人？）の首を狩った時、入れた。後に二人は酷と言うことで一人の首でよいことにした。入れ墨は男にとつて「勇敢」の象徴であった。これを入れなければ、結婚はできない。女は唇の上が成人の時、入れ、唇の下は女の仕事が満足にできるようになった時に入れる。女の仕事は機織り、料理、洗濯、畑の草取りなどがある。男の仕事は狩猟、焼き畑などである。大きな木の枝葉を切り落とし、それを放置して、枯れた後に火をつける。家は移動のため、竹や茅で簡単に造る。移動する時、柱だけは持っていき、新たなところでまた焼き畑をする。

菊池：タイヤル族は狩猟だけでなく、焼き畑をしていたのですよね。

林昭光氏：焼き畑は第一年は陸稲、第二年は芋、第三年は粟という具合に、輪作する。そして、三年目の終わりに木を植え、木を残す。これは土壌の保護に役立つ。

菊池：どのような木を植林するのですか。

林昭光氏：ハンの木（榛の木。カバノキ科の落葉高木。山地の湿地などに自生するが、田畑の畦に植える。約二〇メートルの高さに達する。木材は薪、家具、建築に利用、また、樹皮と果実は染料の原料）などであった。約一〇年後に戻ってくると、そこは森林となっている。ハンの木は現在は減った。板の材料となった。移動時期は家族、親族が一致団結して移動した。いわば頭目組織であった。今は漢族の習慣の影響を受けてあまり団結しないし、したくともできなくなった。タイヤル族の中でも組織が異なり、団結できない。

林茂成氏：移動の時、家の柱は持っていく。「烏心柱」という。柱は樺や檜の木である。木の皮は削り、芯だけを持っていく。今は竹が増え、そうした木々を駆逐してしまった。

林昭光氏：元来、タイヤル族は食事は二回であった。朝食はない。焼き畑は男がおこない、農作業自体は女がする。日本時代、日本語が他部族との共通語となった。タイヤル族には元来、文字がなかった。日本時代、私は自助会長であった。さつき、和夫は私を「郷長」と紹介してくれたが、自助会長である。戦後の郷長に匹敵する役職だ。当時の頭目が、日本時代は「自助会長」、戦後、「郷長」に就任した。……伝達は声、火、狼煙でおこない、例えば、抵抗のため、ゲリラ戦をするなど重要事項は人員を派遣する。

菊池：タイヤル族は台中から台湾北部までかなり広く分布していますが、声、火、狼煙、及び人員派遣などで、連絡は可能ですか。また、台中部から台湾北部までタイヤル族の言語は同じのですか。

林昭光氏：台中から角板山までの直接の連絡はほとんど不可能です。でも、ある地域のタイヤル族が立ち上がったと聞けば、近隣のタイヤル族が立ち上がる。どう言ったらよいか。例えば、台中でゲリラ戦を開始すると、まず近隣のタイヤル族が立ち上がり、次々と立ち上がり、次第に角板山まで波及してくる。タイヤル族の言語は基本的に同じだ。もちろん地域によって異なり、地方弁もあるが、基本的に通じる。タイヤル族には、頭目が「太陽あつて水あれば」と言い出した時、すべてが決定されたことを意味する。すなわち、「太陽」と「水」とは「人間の生命」を意味し、紛争解決の手段として部族が一つに団結することを意味する。タイヤル族存続のために一致団結することだ。高砂義勇隊を結成

した時もそうであった。高砂義勇隊はもちろんタイヤル族だけで組織されたものではない。しかし、あの時もタイヤル族の頭目が「太陽あつて水あれば」と言った。したがって、タイヤル族は一致団結して志願兵となつたのだ。日本によって強制されたものでは決してない。これは徴兵ではなく、自ら志願したのだ。中国大陸の連中や外省人は強制されたと言っているが、それは間違いだ。……日本は制海権も制空権も失つたのだから、必然的に敗戦したと思う。結局、原住民は志願兵となり、閩南人は軍夫として徴用された。

菊池：他にも事件がありましたね。

林昭光氏：日本領有初期、「蕃匪」事件というのがあつた。この時の「蕃」はタイヤル族のことで、タイヤル族は日本によって「生蕃」と呼ばれていた。台湾人「土匪」約五〇〇人が新店、桃園で日本軍に敗北して角板山のタイヤル族に助けを求めた。タイヤル族は「義」を重んじ、台湾人「土匪」を匿つた。そして、「匪」と「蕃」が協力して日本軍に抵抗した。当然、「蕃」が力量的に中心となり、戦つた。その後、枕頭山事件が起きた。この戦闘で、タイヤル族六人が死に、日本軍は食糧運びの台湾人を含む四〇〇〜五〇〇人が死んだ。

菊池：タイヤル族が日本軍より優勢であつたということですか。

林昭光氏：もちろん、この戦闘ではそうだ。ところで、タイヤル族の各部落には、「報恩勸謝の碑」というのがあつた。角板山には、佐久間総督の碑もあつたが、破壊され、そこは水田とされた。

菊池：戦闘に行く時は酒とかを用いて何らかの儀式をするのですか。

林昭光氏：戦争に行く時は「水」、また「首狩り」に行く時も「水」を使った。頭目とは「水（生命）」をもつ人」という意味である。戦争、

現地調査：台湾桃園県復興郷角板山のタイヤル族（菊池）

戦闘に行く時、「水盃」である。酒は使わない。「大仕事」が終わつたら酒を飲む。狩ってきた首を、子供たちが駆け足でやってきて取り取つた。

菊池：詳しいですね。

和夫さん：彼（林昭光氏）は二五歳の時、人口一万二〇〇〇人の「角板郷」の郷長になつたからね。だから、現在、生存している人の中ではもっとも詳しい。タイヤル族に関しては、彼から聞いて書いているものも多いが、間違いだらけだ。彼が死んだら本当のことを話せる人がいなくなつてしまう。ところで、台湾原住民の中で、タイヤル族だけが一夫一婦制だよ。

菊池：さきほどから出ている「角板郷」とは何ですか。

和夫さん：今の復興郷のことですよ。復興郷は国民党がやって来てからの名称だよ。

林昭光氏：戦時中、この辺（角板山）は山本大尉が統治していた。野戦軍が最初に枇杷を自ら食すために植えた。その後、この辺は枇杷の産地となっている。溪口台の水田は日本人が指導した。

林昭光氏：一九五〇年角板山に蒋介石が入つた。角板山には、蒋介石の貴賓館があつた。

和夫さん：これは、昭和天皇が皇太子時代に使用していた別荘を、蒋介石は貴賓館にしたのですよ。総檜造りで立派な物であつたが、一〇年ほど前、大火事で燃え、跡形もなくなつた。檜は油を含んでいるから燃えやすい。

菊池：まず戦争時期のお話をお聞かせください。角板山にも米軍による爆撃があつたのですか。

林茂成氏：角板山には空襲がなかったけれども、台湾各地が爆撃を受けた。特に新竹は飛行場があった関係上、B52に猛爆撃を受けた。日本人官舎は屋根に黒い瓦、台湾人官舎は赤い瓦を使用していた。そのため、黒い瓦の日本人官舎だけが風潰しに狙い撃ちされた……当時、私は台湾におらず、佐世保の予科練（周知の通り、三〇年海軍に創設され、飛行搭乗員養成を主目的に中学四年一学期修了者〔甲種〕、高等小学校卒〔乙種〕に分かれ、志願制である）で、海上特攻隊の訓練を受けていた。高雄に軍港があり、私は、一人乗りの船に黒色火薬二〇〇キロくらいを積んで敵艦に突撃し、自爆することになっていた。だが、米軍は沖繩に上陸し、台湾には上陸しなかったことから、この計画は実施されなかった。そこで、私は死なずにすんだ。こうして、（米軍が沖繩を占領した結果）日本内地と台湾は完全に切り離され、連絡不通となった。

菊池：米軍は中間地域の沖繩を攻撃することで、日本と台湾の関係を切り離す目的もあったのかもしれないね。林昭光さんは、当時どうしていましたか。

林昭光氏：私は岡山県明野（？）の秘密基地にいた。幹部候補生で、内務省所属である。日本での体験から言えば、焼夷弾は本当に怖い。すべてを焼き尽くしてしまうのだから。皆、川に逃げる。そして、息をつくために顔を出している。しかし、火と熱風が川面を走る。そのため、顔が焼かれた。また、飛行機からの機銃掃射に対しては動いてはダメだ。死んだ振りをして倒れていることが大切だ。動くところでも銃撃され、弾が連続で追いかけてくる。

菊池：林茂成氏の経歴を教えてくださいませんか。

林茂成氏：私は戦後、すぐに国民学校の教師になった。その時の生徒

に和夫がいた。

和夫さん：そう私の先生。でも年齢は八歳しか違わない。

林茂成氏：子供の時の八歳の差は大きいし、師弟関係は重要だぞ。……私は小学校教師をしたけれども、日本語と台湾語しか話せない。必死で北京語を勉強して、授業では、簡単な話は北京語で、難しい話は日本語と台湾語で説明した。努力していたにもかかわらず、日本語と台湾語の授業だと言って、外省人教師の数々の批判と嫌がらせを受けた。ひどかったですよ。そこで、学校を辞めて、一般会社（不動産関係？）の会計に転職した。

林茂成氏：二・二八事件が終わっても、台湾は三七年間も戒厳令を敷いていた。こんな国がありますか。世界に類例がない。私の弟は建国中学高中部を卒業したばかりなのに、一二年間も拘束され、獄中にいた。「知りながら報告しない」という訳もわからない罪ですよ。下手なことを話せば、友だちを陥れてしまう。

菊池：今、次男の茂秀さんは今どうしていますか。

林茂成氏：弟は獄から解放された後、日本に留学して愛知医専を卒業した。内科医で、日本で開業していたが、体調を壊し、台湾に戻ってきた。今、七五歳ですが、脳梗塞で寝たきりです。

インタビューが終わった後、昼食は近くの料理店でご馳走になった。一つの皿の肉が柔らかく美味だったので、「この肉は何ですか」と聞いた。林茂成氏によると、「キョン（羴）の肉です。大人になっても小型の鹿ですよ。昔はこの辺でも採れたが、今は高い山や、深山に行かなければ採れない。激減したので、保護動物に指定されている。でも、『山

の人」が現金収入のため、ある程度採っている。本当はよくないのだけれども、政府の方も『一定数ならば』と黙認しているのではないですか」ということであつた。

註

(1) 林昭明(ワタン・タンク)氏が書いた回憶録(中国語)の解説、訳、及びインタビュー内容は、拙稿「一九五〇年代台湾白色テロ受難の回憶」、東洋文庫『近代中国研究彙報』第二二号、一九九三年三月を参照されたい。

(2) 復興郷は桃園県南端の山岳地帯で、東の達観山、南の西丘斯山、泰矢生山があり、海拔二〇〇〇メートル以上である。復興郷の北は大溪鎮、台北県の三峡鎮、東は台北県の烏來郷、東南は宜蘭県の大同郷、西南は新竹県の関西鎮に接し、総面積は約三五〇平方キロメートルに及ぶ。復興郷は三民、澤仁、羅浮、義盛、霞雲、長興、奎輝、高義、三光、華陵の一〇カ村から構成される(桃園県政府「桃園県変更都市計画審核摘要表」(一九八〇、七、五、八、三公開)一二一―一三頁)。こうして、桃園県政府は、風光明媚な地域として、観光事業に力を入れようとしている。現在は漢民族が一定程度、入り込んでいると考えられるが、復興郷全体が、元來、「山胞」(山の人)の中でもタイヤル族の居住区であつたと思われる。

(3) これを「敵首棚」と称し、通常、各部落の入口に設けられ、出動、獲得した敵の首級・頭蓋骨を並べる。それは次のような意味があつたとされる。①警告——その部落が強力な戦力を有していることを顯示し、敵に輕拳妄動、報復しないように警告する。②悪霊からの防禦——部落内で絶えず疾病、飢餓などが発生した場合、それは部落の精神力が減退していることを意味し、悪霊が侵入してくる。そこで、強者の霊によって鎮守する。③生命の尊重と同一性——敵の首を一定の場所に奉納することで、その生霊を尊重し、早く「帰天」(あの世に行く)ことを祈る。また、周囲の靈魂と共に部落と結びつき、生命共同体を形成する(九族村にあつた説明文参照)。

(4) 和夫さんの父、「泉民雄」(中国名は陳祥隆)氏は新竹州警務所部長(現在現地調査：台湾桃園県復興郷角板山のタイヤル族(菊池))

の派出所長を経て新竹州官派参議員(現在の県議員)に選出された。その後、復興郷供銷(購買・販売)会經理、郷公所建設・財務課長などを歴任したが、一九五五年死去、四四歳であつた(緑さんからの提供資料)。

【付記】和夫・緑夫妻の話に多くの研究のヒントを得た。インタビューをしながらも楽しい時間を過ごすことができた。また、台湾では、中央研究院近代史研究所の黄福慶氏、友人の魏榮吉氏(名古屋外国語大学)、黄徳財氏(弁護士)、張修慎さん(静宜大学)にお世話になつた。心からの謝意を表したい。